

戦後革新と基地・公害・住民運動

—— 仲井 富氏に聞く

では、今年度初めての研究会を始めます。仲井富さんは公害問題研究会代表幹事、元日本社会党機関紙局総務部長でいらっしゃいます。

はじめに——護憲の党に関わって

仲井 略歴にも紹介されていますが、私は1951年7月に岡山県連（左派）の書記となり、1955年、社会党左派本部に青年部の事務局長として書記局に入りました。その翌月10月に左右社会党の統一大会によって、統一社会党の軍事基地委員会の書記に任命されました。そして青年部も左右統一によって、青年部長は左派の西風勲氏、副部長は右派の荒瀬修一郎氏ということになり私は青年部事務局長になりました。そういう関係で、統一社会党の中で幸運にも軍事基地委員会（委員長加藤勘十）に配属され、55年10月からの砂川強制測量阻止闘争に参加しました。その後数年間、百里原の自衛隊基地闘争とか、東富士の米軍オネストジョン（核弾頭搭載地对地ロケット）射撃場反対などをはじめ全国の米軍、自衛隊基地反対闘争と関わって

きました。1969年に社会党が選挙に大敗しまして書記局のクビ切りが始まりました。私はその時に辞めまして、以後、1970年代の公害問題というか、全国の環境破壊に対する住民運動の裏方みたいなことをしてきました。臼杵の大阪セメント反対運動とか、伊達火力環境権訴訟とか、全国の住民運動に関与してきました。

公害元年と言われた1970年以降は、社会党本部を辞め、公害問題研究会をつくり月刊誌『環境破壊』（1970～1987年）を発行しながら、全国の公害反対住民運動の、いわば裏方として全国をかけめぐりました。したがって1970年までは社会党本部書記局員として、その後は住民運動の中で人生の大半をすごしました。いわば戦後革新というものを江田三郎（1907～1977年、元社会党委員長代行）の構造改革を中心とする党内闘争を含め内部で観察してきた面と、70年以降は外から社会党革新の崩壊する様を見てきたとすることができます。その中で私が見てきたこと、感じてきたこと、いわば大衆闘争との関係で社会党革新とか総評はどう

本稿は、2015年4月5日（日）に、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階会議室にて開催された、第17回社会党・総評史研究会の記録である。出席者は、五十嵐仁、岡田一郎、芹澤壽良、細川正、前田哲男、米山忠寛、木下真志であった。

これまで仲井氏が関わってこられた運動について、自由にお話しいただいたものを再構成したうえで、読者の便宜を考慮し、中見出しを付した。（木下真志）

*第15回社会党・総評史研究会の記録は本誌2016年3月号（689号）に掲載されている。今号では、都合により第16回の記録より先に、第17回の記録を掲載する。

だったのか。最終的に、ほぼ1970年代半ばをもって戦後の社会党総評を中心とする革新勢力は崩壊したというふうに思っているわけです。

その後、土井たか子（1928～2014年、社会党委員長・衆議院議長等を歴任）委員長時代に、社会党の1980年代末における参院選挙の多数派形成などありますが、基本的には70年代半ばで戦後革新の時代は終わったというふうに考えています。以下に現場で見た社会党総評など革新勢力の実態をお話してみたいと思います。私自身は、1949年以来45年間社会党の党員でしたが、1994年の村山自社さ連立政権での社会党中央の方針に抗議と反対の意思を示すため離党しました。今はまったくの無党派の立場でものを言っています。

1955年の砂川闘争から 70年代の反公害運動の経験

私が関わってきた住民運動の現場感覚で砂川闘争からの米軍自衛隊基地反対闘争、70年代の公害反対闘争を振り返ってみますと、実力があって政府と対等に闘った地域の基地反対闘争および70年代の公害反対闘争では、「被害が出たら裁判」という被害者救済闘争ではなくて、公害予防闘争としての、70年代からの住民運動は、「火力は建てるな、原発は造るな」とい

うかたちで私はやってきました。今日、原発が大きな問題になっていますが、原発を数多く阻止した例もあります。そういう自治体とか住民運動を私なりにこの数十年間の経験から振り返りますと、左翼が主導権をとった住民運動はほぼ負けています。勝利したり、あるいは対等に闘ったというのは、保守勢力のしっかりしたリーダーがいたところだという歴史的な事実があります。ところが、社会党などの党史を見ても、そういうことを全然書いていない。

繰り返しになりますが、私が初めて関わったのは1955年10月の砂川闘争です。このころ共産党も朝鮮戦争でソ連を支援するための武力闘争路線を取って失敗していた。スターリンの指示で内乱に転化しろなどと言って、国際派とか所感派が争って国民の支持を完全に失った時です。55年というのは方針を変えたという六全協（日本共産党第六回全国協議会）をやった直後ぐらいです。学生運動もその影響で非常に低迷していた。

私は砂川闘争に3年ぐらい行きました。基地反対闘争の現場で泊まり込んでやっていました。私たちは1955年9月のあの激突、それから1956年に全学連が砂川で一緒に座り込みをして、10月13日に警官隊が雨の中で警棒を振るいました。経験している方もいらっしやると

仲井 富（なかい・あつし）氏略歴

1933年1月 岡山県苫田郡鏡野町生まれ
1949年 社会党岡山県連入党
1951年7月 社会党岡山県連左派専従書記
1955年9月 左派社会党本部青年部事務局長として上京
10月 左右社会党統一で三宅坂の日本社会党本部へ
青年部、軍事基地委員会書記
10月 砂川闘争に初参加
以後、米軍基地突入事件、百里原自衛隊基地、富士米軍射撃場、群馬ジラード事件など米軍・自衛隊基地反対闘争にかかわる
1958年 日本社会党青年部長

1968年 日本社会党国民生活部長
1969年 日本社会党機関紙局総務部長
1970年～ 社会党本部辞任
公害問題研究会事務局長
『環境破壊』発行
1970年～1990年代
白桦大阪セメント進出反対運動、伊達火力環境権訴訟、直江津火力反対運動、逗子米軍住宅反対運動、大規模林道反対運動などにかかわる
この間、住民ひろば、住民図書館など住民運動の交流、資料センターの設置、消費者集団訴訟、一株運動などにかかわる
現在 公害問題研究会代表幹事

思うけれど、それでめちゃくちゃ打ちのめされたわけです。座って、「南無妙法蓮華經」を唱えている無抵抗の日本山の坊さんまで警棒で殴りつけて大けがをさせた。幸い死者は出なかったが、重軽傷者1,000名ということで、徹底的にやられて強制測量をやられた。現場の感覚としては、打ちのめされて敗北です。雨の中で打ちのめされて悄然とした思いでした。

その夜、総評と社会党の役員と国会議員団の最高会議がありました。どうするかといった時に、「これ以上、犠牲者を出さないほうがいい、明日以降の動員を中止して話し合いをすべきだ」と言ったのは、労働組合出身の左派の国会議員たちです。彼らがもうやめようと言った。ところが戦前からの無産運動、農民運動をやってきた人は左右を問わず、「ここまでやられて引くわけにいかん」と言うわけです。僕はその時に22歳の青二才ですが、驚きました。10月に左右合同社会党が発足したばかりで、その直後の砂川闘争ですから、当然旧右派社会党の人も来ているわけです。左はやるべきだと言い、右は話し合いをすべきと言うだろうと内心思っていたら、逆の結果が出た。私は当時、単純な左派だったから、えっ、左派は闘うほうで、右派は妥協するんだと教えられていたのに、ちょっと違うなど。これがその現場にいた時の感覚です。これは大事な経験でした。

右だ、左だと思っていたら大変な間違いを犯す。闘争が厳しいことになった時に判断を決めるのは、その人の人格とか経験とかものを見る広さとかそういうものだなと。僕だってその時はこれだけやられてと迷っていましたから……。総評はその夜、1万人動員という指示を出しました。そうしたら政府のほうがあわててしまって、その晩、夜の8時か9時に閣議を開いて砂川の強制測量を中止すると発表した。一時的には大勝利ということになりました。しかし、そ

の後砂川闘争のホントの勝利は、1969年の米軍撤退まで10数年の法廷闘争を主とした地道な闘いでした。反対同盟員が次々と切り崩されて、130戸から23戸まで減少していく中で戦い抜いて勝利を手にするわけです。

その後いろいろな闘争をずっと見てくると、そういう例が多い。例えば、その後の北海道の伊達火力発電所ですね。1970年から80年までの10年間、日本で初めて環境権訴訟をやった伊達火力環境権訴訟というのがあります。労働組合はデモや集会に来ます。労働組合は必ず「最後まで団結でがんばろう」と言います。炭労闘争以来、全部そうです。今は自民党までやっていますけれど、あれぐらいインチキなスローガンはないのです。「最後まで団結でがんばろう」なんて、地元にもいない労働組合の人が頑張れるはずがない。そういう支援労組の発言に、現地住民が後ろのほうで「最後まで来てくれなくてもいいけれど、肝心な時に来てほしいな」って。それはあっちこっちで聞きます。常に労働組合とか社会党は「最後まで団結でがんばろう」と言うけれど、三里塚闘争でもそうですが、大事な時期に逃げていきます。選挙があれば逃げていくし、方針が変わればやめる。そういうことを何回も経験しているから、今でもやっている人がいますが、あんな空疎なスローガンでは誰もついていけないということが分からないんです。そこではもうちょっと違った地域住民との接触なり支え方をしないとだめです。

百里原自衛隊基地をめぐる山西きよさんの闘い

私は幸いにして砂川闘争の後、いろいろなことを経験しました。もう一つ例を言います。1956～7年ごろから百里原の自衛隊基地反対闘争というのがあります。これは僕もかなり打ち込みました。日本で初めて基地反対の女性町長が誕生しました。山西きよ（1909～1996年、

元旧小川町長、戦後初の女性町長) という方が当選しました。この方は農機具とか飼料をやっている肥料屋のおかみさんです。それを法廷闘争で応援したのが主として左側の共産党の弁護団です。そうしたら自民党たちが妨害して4年間もたなかったのです。山西きよ町長のリコールをやって、リコールしてしまって、次の選挙で敗北します。次の町長選挙にも出るけれど負けてしまって、百里原基地反対闘争は敗北します。戦後の開拓地ですから農民もみんな逃げていってしまった。開拓地というのは愛着がないのですから。それでも、その中で土地を売るという人々を山西さんが説得して、共産党の弁護団などにも助けられて、自衛隊の基地予定地の一部を自分の土地にしたのです。

私どもは町長選挙に負けたら他のところへ行くわけです。負けて終わりだと思ったら、選挙が忙しいとか、三池闘争があるとか、労働組合とか社会党はその場では「皆さん、最後まで断固闘おう」とか言うけれど、行かなくなるんです。私もその後のことはあまり知らないでいました。2006年、昔一緒にやっていた共産党の松原日出夫という、僕よりちょっと年上の男ですが、彼を知っていたから住所を探り出して、水戸に住んでいたので電話をかけて会いに行ったんです。そして彼からその後の、山西町長が亡くなるまでの反対闘争の歴史を聞きまして「松原日出夫に聞く百里原闘争」というのを『月刊むすぶ』(443・444号、ロシナンテ社、2007・2008年)という雑誌に2カ月連載しました。

その時に松原さんは「仲井さん、これは山西きよ元町長が最後まで闘ったせいです」と言うのです。あそこの自衛隊基地は、ほとんどの人が知らないが、「く」の字に曲がっています。世界中の基地で「く」の字に曲がっている滑走路なんてどこにもありません。なぜか。山西さんが死ぬまで、死んでも、土地を売らなかった

から。最高裁で負けるけれど、最高裁まで自衛隊は違憲だ、あの百里原基地は不当だということをや訴え続けて、87歳で彼女は亡くなります。

私などは世の中を甘く見ていて浅はかだから、山西さんは町長選挙で負けたから肥料屋さんのおかみさんに復帰して、一生終わったんだろうと思っていました。ところが実際には保守の塊みみたいな山西さんは、戦争中に兄貴を亡くした。こんな戦争、二度としてはいけない、私は憲法を守るために最後まで闘うとあって、彼女の生涯をかけた護憲闘争として百里原自衛隊基地反対を続けたのです。それを最後まで応援してくれたのが共産党系の弁護士ですが、山西きよさんという強固な保守の肥料屋のおかみさんの闘う意志がなければ、土地も売って完全に負けているのです。しかし、この人は最後まで土地を売らなかった。その結果が、世界の軍事基地に例を見ない「く」の字滑走路」という、いびつな自衛隊基地ができ上がったわけです。

住民運動の新局面——「生活なくして闘争なし」

今もそうですが、住民運動というのは、激突する時とか、全学連がやった時とか、1956、57年の激突の時の写真集は残っています。砂川闘争というのは1945年の敗戦と同時に米軍が進駐してきて接収されて、それから二十数年間の闘いがあります。左翼が一生懸命やったようなことを言って立派な写真集を出しているけれど、彼らがやったのはその間の3年間なのです。全学連がやった、社会党がやった、共産党がやったのは、ほんの一部なのです。あとの十数年間は地元のお百姓が営々とやっているのです。田んぼを作りながら生計を立てて頑張った。その十数年の営々たる闘争の結果、砂川闘争の勝利というのがあるわけです。そういうことを左翼の歴史は、社会党の歴史でもまったく書いていません。イデオロギーはあるけれど、

そこに住む地域と人間の生活という視点がないから、ダメなのです。私はこのことをいつも言っています。旧左翼や旧社会党に欠けているのは地域の生活と闘争の地道な結合という観点です。生活と地域がないから、完全に失敗した70年の全共闘運動のような一見派手な街頭運動に意義があると思ひ込むのです。

全共闘運動華やかかなりし1969年に新宿騒乱事件がありました。私も友人たちと現場に行ったのですが、確かに交番が襲われたり火炎瓶が投げ込まれたり騒然たる雰囲気でした。だがよく見ると面白がって暴れているのは学生たちだけではなく、新宿のホームレス、いわばルンペンたちです。日頃警察にいじめられている鬱憤晴らしに、石を投げたり交番を襲ったりしているところが唾然としたのは、隣に数名いたベ平連の学者とか文化人など数名が「革命だ、革命だ」などと興奮しているんです。「何を見て革命だと思っているのか。労働者なんかいないところでルンペンの投石くらいで革命だと?……」と思ひましたね。

白杵の保守と漁民の大阪セメント反対運動

1970年、私が経験したのは大分県白杵の大阪セメント反対運動です。そこでどういうことがあったか。私はそのころまだ37歳で、社会党を辞めて公害問題研究会をやっていて、自治労とわりあいつきあいがあったものですから、たまたま自治労に行っていましたら着物を着た上品な奥さんがやってきた。自治労はそのころ、自治研修会とか住民運動のつきあいを比較的やっていたので、その奥さんは、いま白杵市で大阪セメントの反対運動を始めたけれど、何か手伝っていただけませんかとやってきたわけです。後で分かったけれど、フンドーキン醤油という江戸時代から続いているような有名な地元の醤油酒屋会社の副社長、小手川道郎さん(1922～2003

年)の夫人だった。その地場産業の人たちが、大阪セメントが進出して来たらセメントの粉塵で水がだめになる、反対だと言ひ出したのです。

でも真っ先に運動を始めたのは、白杵の漁民のおかみさん(亀井良子さん、主婦、生没年不詳)たちなのです。隣町の津久見市には、セメント会社があり粉塵被害で困っている情報を、白杵に住む小学校教員の田口秀世さん(生没年不詳)という女性がよく聞いて知っていた。これでは困る、海を汚されるということで数人の漁民のおかみさんたちと話し合い「大阪セメント進出反対」の署名運動を始めた。亭主は「突きん棒」という沿海漁業に行っていますから、女性たちが子供を背負って署名運動をやって最初の闘争が始まるわけです。数名が必死になって町を回ってやっていた。それに地場産業が気づいて、これは大変なことになる、おれたちの醤油や味噌や酒や水がおかしくなる、商売あがったりだとなった。そうなる地元企業は力がありますから、公害追放白杵市民会議という1枚刷りの新聞を全家庭に配っていったわけです。それで公害追放白杵市民会議というのをつくり、『大分新聞』の全ページをつぶして大阪セメントは水と空気を汚すから反対だという広告を出します。漁民と地区労と地場産業が力を合わせて反対運動をやって、共産党もそれに参加して、白杵は結局いろいろな闘争をやって勝ちます。フンドーキンの副社長の小手川道郎さんは、かつて自民党の大物代議士の一万田尚登(1893～1984年、第18代日銀総裁)の選挙参謀までやった本物の保守だった。

たどっていくと白杵市というのはキリシタン大名の大友宗麟からあったところなんです。そして作家の野上弥生子(1885～1985年)の出身地です。フンドーキンの小手川さんは野上弥生子の甥です。野上さんという人は、僕はそれまで読んだことがなかったので後でいろいろ調べて

みたら、宮本百合子（1899～1951年、宮本顕治夫人）などと親しくて戦中からえらい反戦の人です。野上さんは99歳で軽井沢で亡くなりますが、彼女が死んだ後、小手川さんはこういうことを言っています。とにかく物忘れをする。甥の小手川さんと話をして名前が出てこないとひと晩中考える。90を過ぎたおばあさんが夜中に「あの人は誰々さんよ」と電話してくるというのです。それを彼女が言っているのは、忘れたからといって放っておいたらますますぼける。僕なんかはやれないけれど、それを必死になってやらなければどんどん呆けていくから、それはだめだって。それで夜中に電話してきたそうです。野上さんの戦中とか戦後の日記を見てみると、すごい昭和天皇批判です。「沖縄であれだけの人を殺しておいて沖縄の日に天皇は一言もお詫びを言わない、けしからん」という日記を書いています。そういう意味で私が言うのは、全国各地の地域には保守リベラルとか右翼とか思われている人たちの中に広範な反戦と護憲の意識があるということです。

砂川闘争の裏面——篤農家のリーダー

砂川闘争はあれだけの大闘争を二十数年間続けてきました。私は1980年に「わが戦後史と住民運動」というテーマで、戦後の大きな基地闘争とか公害闘争をやってきたリーダーを12人選んで『月刊総評』（総評情報宣伝部編）に載せようと全国を、沖縄から北海道まで取材して歩きました。1980年ごろというのは70年代の公害闘争、基地闘争が風化し始めたころです。ですから、生きている間に聞いておこうと思って歩いたわけですが、これは良かったと思います。「わが戦後史と住民運動」というテーマで聞き歩きをしまして、それを『月刊総評』が1年間（1980年）載せてくれたわけです。

その当時、宮岡政雄さん（1913～1982年、反

対同盟副行動隊長）はもう66歳でした。砂川闘争が勝利した後、脳溢血で倒れて奥さんと2人でリハビリをやっていました。そうなるとうると闘争の時に聞けない話を聞けます。なぜあそこまで頑張れたか。彼は二つ言いました。田中せんさん（生没年不詳）という方は基地の真っ正面に土地を持っていましたが、このせんさん親子が土地を絶対に売らないと頑張ったことが一つです。当時は調達庁ですが、調達庁の親戚に行ったり、あちこちを使って「土地を売れ、土地を売れ」と攻めてくる。親戚から全部動員してくるわけです。それで、うちにいたたまれなくて親子で逃げ出したことがあるということです。公害問題でもそういうことがいっぱいありますが。結局、せんさんが滑走路の真っ正面の、延長するところの土地を売らなかったために滑走路拡張はできなかったのです。宮岡さんも言っておりましたが、もしせんさんが売っていたら、おれがいくら頑張っても米軍基地の拡張はできていたと。そういう人が何人かいるわけです。我々は砂川闘争でスクラムを組んでワッショイワッショイやっていただけですが、そういう人が二十数年間、土地を売らないで頑張ったということです。

宮岡さんはもう一つ秘話を話してくれました。小学校の講堂に全学連を泊めたり、学生を泊めたり、それから阿豆佐味天神というのは村の神社ですが、その神社で自由に集会ができたのはなぜだと思いますか。今どきだったら大問題です。学校の講堂に学生を泊めて反対運動をやったり、神社で反対集会を連日やったりということがなぜできたのか。それは我々が二百数十年間の百姓で、青木市五郎さん（1900～1985年）というような人はあそこの篤農家で一番尊敬された人です。ああいう篤農家が先頭に立ったから、少数派になったが最後まで裏切らずに付いていったのです。それと、宮岡さんは地域の実

力者ですから阿豆佐味天神の総代なのです。総代が言うから神主も文句を言わないで自由に使用させたのです。要するに、あれは地元における我々の実力ですよ。なるほど、これは左翼とか革新の側からは出てこない発想です。しかも宮岡さんたちは戦略的にもを考えています。

最近、砂川闘争と沖縄の辺野古基地反対運動の交流が始まったのですが、娘の京子さんから聞いた話です。1969年に米軍基地撤退が決まると、宮岡さんは数件の貸家を土地に建てた。それはかつて米軍の滑走路延長の対象の土地です。今後自衛隊基地になった後に滑走路拡張の話が出て、ここの貸家を建てることで阻止することができるということで砂川米軍基地の後に来る自衛隊基地の存在を意識して、対抗措置を取ったのです。さらに青木市五郎さんや宮岡さんたちは、自分たちの土地に、国立市に戦前からあった国立音大の誘致をやったわけです。1978年、米軍基地撤去から9年後です。京子さんに言わせると、かつての米軍滑走路の延長線上になるんです。ここに音楽大学を作っておけば、新たな自衛隊の滑走路延長を、大学の上を飛ぶことになる計画は阻止できるという発想なのです。そこは左翼の単純な基地反対・護憲という発想とは違って将来を見据えた戦略的な反対闘争なんです。砂川基地で半世紀苦しめられたから、今後50年、100年を見据えた反対闘争なのです。そういうことを砂川闘争60年を経て、改めて私は教えられているのです。

自分の生まれ育った地域で、地域の歴史とか伝統をよく知り尽くして、その土地を絶対に売らないという人たちがいなければ、いくら労働組合があろうと、政党が何をしようと永続的な闘争はできない。かつて三里塚では社会党の国会議員が1坪地主になったでしょう。それが細川政権になって、野党の自民党に追及されたらほぼ全員がその土地を売ってしまっているわけですか

ら、いい加減なものです。自分たちの都合のいい時だけ反対運動を利用して、そして都合が悪くなると逃げていく。そういうことは歴史の中にきちっと書き残しておかなければいけません。学者や評論家を書いた戦後の基地闘争とか住民闘争にはそういう視点がまったく入っていません。

安保闘争をめぐる

60年代、安保闘争についてのお話です。安保闘争の時に高揚する契機になったのは1959年11月27日の国会突入事件です。あの時は共産党も総評も社会党も、全学連（全日本学生自治会総連合）が突入したためにあのようなことと言いましたが、これは事実と違います。私も現場にいて突入しましたが、最初、全学連は後ろのほうにいまして、東京地評（東京地方労働組合評議会）のデモ隊が突入したのです。それから我々社青同とか社会党の連中が入って国会をワッショイワッショイ、中庭で、正面で、デモが始まったのです。その後、全学連が後ろから来て入ったということです。

当時は国会突入、占拠というふうな発想ではなくて、とにかく国会の庭でデモができるというので喜んでしまって、国会の神聖な階段で小便したり、わっさかわっさか大騒ぎになりました。そうしたら総評、社会党、共産党があわててしまって宣伝カーの上で、総評は岩井章事務局長（1922～1997年。1955～70年に事務局長）、共産党は神山茂夫（1905～1974年）、社会党は浅沼稻次郎書記長（1898～1960年、書記長、委員長を歴任）などが、「諸君、とにかく目的は達成したから正々堂々出よう」と説得したのです。何を言っているんだ、いま入ったばかりなのにというのでみんな集まってきて、宣伝カーを蹴飛ばしたりしてね。当時、私は青年部長でしたが、社会党の国民運動局長は赤松勇（1910～1982年）という人で、今の名古屋

の赤松広隆（1948年～、元社会党書記長、現民主党最高顧問）氏の親父です。左の人で、演説はなかなか勇ましかったけれど、これが真っ青になって「仲井君、どうするんだ、どうするんだ、大変だ、大変だ」と言うんです。「いや、大変なことはないでしょう、せっかく入ったんだから、くたびれるまでデモをやらせたらいい、お腹が空けば出ていきますよ」と言ったんだけど、大変だ、大変だと騒いでいた。

その後は僕が思ったように、みなお腹が空いたし、欲求不満を発散したし、夜になったら自然に、別に警官が何かやったわけではなくて、出ていきました。そういう状態なのに翌日は『赤旗』からマスコミも含めて、全学連が入ったと大騒ぎです。共産党にいたってはトロツキストなどと言っていたころだから、全学連攻撃になってしまいました。それで12月に社会党の中央委員会がありまして、この時に赤松国民運動局長が立って「あれは全学連がけしからん、全学連がああいうことをやったから」と弁解したのです。私はたまりかねて発言を求めた。「いま赤松局長の言っていることは事実と違います。あの時は東京地評の労働者が先に入って、社会党の僕らが入って、その後、全学連が入ったので、事実関係が違っている。全学連がやったから、我々はその後、ついていったというのは事実と異なる。取り消してくれ」と発言しました。

元小学校校長の愛郷心と 直江津火力反対運動の勝利

それから、皆さんはご存じないだろうけれど、1970年代の前半に、直江津火力反対運動という有名な闘争がありますが勝っています。このリーダーの熊倉平三郎さん（1906～1980年）という方は、元校長で、田中角栄の後援会幹部でした。田中角栄の恩師というのがいます。田中角栄（1918～1993年、元首相）が小学校を

出て、頭はよかったけれど上の学校に行けないというので桜の木の下で泣いていたら、その恩師が「角栄、泣くな、学校へ行くばかりが人生ではない」と慰めた。でも、角栄はとにかく東京へ出て勉強したい。親父が馬を売って東京へ行くまでの金をつくってやった。角栄は東京へ出て行って、まず神田で新聞配達の仕事を見つけた。朝は牛乳配達の仕事をした。彼は頭がいいから經理の学校とか二つ学校へ行きます。それで校長のところへ行って、私は学校に来られない場合があるけれど、友達のノートを借りて勉強しますから認めてくださいと認めさせる。新聞配達と牛乳配達の仕事をしながらかつ田中角栄は二つか三つの専門学校を卒業します。

戦後、田中が帰ってきた時、田中角栄の人生は子供たちの範とするに足りるというので、元の田中の恩師と熊倉さんという小学校の校長たちが中心になって田中角栄の最初の選挙を応援します。ところが新人だから人が集まらない。そうしたらその校長先生は人が来ないからというので、昔は農村に半鐘（^{はんしょう}釣鐘の小さいもの。火の見櫓につるし、火災・洪水・盗賊などの非常時に鳴らす）がありました。その半鐘をたたいて、それで人が「何だっ」て出てきたので、田中に会わせたなどというエピソードがあります。そういう人たちがあって田中角栄はあれだけ成り上がったという面もあります。やったことは、金権政治をつくってしまったけれど、田中の人柄、ひたむきさを地元の人は分かっていたわけです。

そのような田中角栄の直江津での後援会長をやったような人が、田中角栄の国土改造計画の一環の直江津火力発電所の、建設反対運動のリーダーになってしまうわけです。この人はどういうことを言ったか。黒井（現、新潟県上越市北部）という地域ですが、すでに公害のある地域ですから、「このままでは黒井の郷土が公

害でつぶれてしまう」と反対運動に立ち上がり、1973年の闘争勝利集会の日に脳溢血で倒れて、数年間、左手で絵を描いたりしていましたが、亡くなります。そういう保守の頑固な愛郷心、正義感のようなものが「老人決死隊」と言うような三里塚闘争を見習った組織作りで処理したわけです。

砂川でもやりましたし、三里塚でもやりましたが、あそこでは老人決死隊というのをつくりました。なぜか。直江津にはあの辺にいっぱい化学工場があるでしょう。息子たちはあそこへ通っているわけですから、子供たちは反対運動ができない。だから、おまえらは働けと。結局ばあさんとかじいさんで老人決死隊をつくったわけです。それで三里塚へ行って見てきたりして団結小屋を作り、反対運動をやって、数年間の後に火力を阻止して勝利します。だから、日本国中を回ってみるとなかなか見上げた保守がいるのです。

革新市政と対立する横浜新貨物線反対運動

横浜新貨物線の革新市長と反対運動の対立というのは、70年代初頭の住民運動の、革新自治体が続々と出てきて、それに対して住民運動が対立していくという新しい時代に入ってしまったのです。この辺の総括もまったくされていません。私が70年代に社会党を辞めて公害問題研究会を始めた時、横浜新貨物線反対同盟の事務局長の宮崎省吾さん（1936年～）が『朝日ジャーナル』（朝日新聞社）に「公共の住民収益に抗して」という論文を書いています。私には非常に新鮮だったけれど、その中で彼が言っていることを簡単に言います。

「過去の住民運動の敗北の主体的条件を探れば、一つには住民運動に反独占闘争あるいは左翼の理論を仕込み、真の敵は政府・自民党であるとか安保体制だとか主張し、運動自体を保

守・革新のカテゴリーにおける革新陣営の運動にしてしまったことである」と。まさに我々があの基地闘争以来、三里塚を含めてやってきたことを突いています。これが敗北の原因だと。

「敵を明確にしなければならないと言ったことは確かである。しかし、住民運動にとっての敵というのは、安保体制とか独占資本ではなくて、具体的な新貨物線とか道路とかごみ処理場であって、抽象的な安保体制などではない」。つまり、左翼が常に掲げてきた運動の原理・原則を否定したわけです。そういう流れの中に私がいま言った、臼杵で言えば地場産業を壊す大阪セメント反対とか、伊達火力で言えばきれいな海を壊す環境権訴訟とかがあるわけで、地域の環境とか産業とか人間とかを壊すから我々は反対だと保守勢力も中心になって70年代の住民運動は成立していきます。一方、革新自治体と住民運動の激しい対立が繰り返された時代でもあります。

80年代になって逗子の市民運動というのが起こります。「全日制」の主婦を中心にした典型的な都市型住民運動です。最終的には負けましたが、保守勢力がいままで池子弾薬庫跡というものを米軍の住宅にすることに反対してきたのを、その公約をひっくり返した。今度の辺野古と一緒ですよ。自分が選挙の時に反対しておきながら、事実上はそれを無視して米軍と神奈川県と話を付けて米軍住宅受け入れの方針を決めたわけです。この土地は、地元は自民党の、当時は5名区ですから、小泉純一郎、田川誠一、岩垂寿喜男、中路雅弘、小川泰、市川雄一かな（1979～1990年ごろ）。とにかく共産党と公明党と民社が落ちたり入ったりしていた地区です。共産党1名でね。今の沖縄の状況によく似ています。

その中で中央大学の横山桂次研究室が世論調査をしました。日米安保条約と政党別支持率を

見てみると、今の安倍内閣の状況とよく似ています。政党支持率でいうと、当時の自民党支持率が33%です。いま30%か40%でしょう。社会党が8%です。今の民主党の支持率ぐらいです。公明党、共産党、民主党となる。共産党はちょっと低すぎますが、当時も多党化現象ですから、よく似た構造です。支持政党なしが43%。今とだいたい似ていますよね。

この支持率の中で当時の市民意識として日米安保条約についてはどうかといたら、全体では67%が必要だと認めています。自民党支持者は83.9%。社会党支持者でも50%。反対は30%ですから、過半数以上です。支持政党なしでも58%。この段階で米軍住宅に反対して5回住民投票をやったり市長選挙をやったりして、5回とも反対派が勝つわけです。だから、今の沖縄とよく似ていると思うのは、社会党、共産党、地区労という勢力でない勢力が富野暉一郎（1944年～、元逗子市長、島根大、龍谷大教授を歴任）みたいなノンセクトのリーダーを担いで主婦層を中心にして、あそこは有名人も住んでいましたから、反対運動を起こして二度の市長選挙、リコール2回、市議選、市長選とやって約8年間2期の富野が辞めるまでつきあいました。彼らといっしょにやってみて、保守リベラルとか無党派を巻き込んで初めて多数派形成ができる。臼杵の市民運動でもそうですが、革新を自称する人たちはこれが理解できない。

天皇に三里塚御料牧場の空港化反対を直訴した菅澤老人

三里塚は昭和天皇に直訴した菅澤老人（菅澤一利、生没年不詳）という有名な人がいます。これは『月刊むすぶ』にもインタビューを載せていますが、御料牧場（皇室で用いられる農産物を生産している農場（牧場）。宮内庁が管轄している）がありましたから、あの辺の農民た

ちはすごい天皇崇拝者です。明治大帝以来の牧場を基地にするなどけしからん、天皇の御心に反すると思ってしまったんですね。天皇は賛成しているんだけど。それで田中正造以来の天皇直訴を決意します。朝早く起きて、何人か連れて、命懸けでやるからといって水盃をして、白装束か何かで宮内庁に向かいます。ついに宮内庁で会見して、直訴状を渡して、明治大帝以来の御料牧場を基地にするなどけしからん、宮内庁、ぜひ取りやめにしてくれと言うんだけど、宮内庁だって政府の手先ですから最終的には強制収用になります。彼が最後にやったのは、警官が突入してきた時、クソの桶をためておいて、それを警官に振りまいたのです。逮捕されて留置場に入れられますが、とにかく臭くてかなわないから早く帰せとなりました。ですから、保守の人にはなかなか愉快的な、でも、どうしようもないやつがいるんです。あれだけ続いたのは……。

1970年代には、北海道伊達火力環境権訴訟の正木洋さん（1931年～、原告団事務局長）という人も、国語教師です。この人もまた珍しく日教組に入っていません。それで主任とか何とかにならないで、一平教師を通します。日教組は口ばかりで反対だ、私はあくまでも組織に入りませんと。普通、子供たちは先生に年度末とか何かに贈り物をするでしょう。これを全部送り返す。子供の結婚式とか何かも全部お断りする。一種の仙人ですよ。酒が好き、魚釣りが好き。そういう人がおかしいというので「伊達火力誘致に疑問を持つ会」というのをつくりました。反対ではないのです。疑問を持つ会というのをつくって、その先生と仲間たちが集まって伊達火力環境権訴訟というのを戦後初めて行います。環境権訴訟を起こしたところはいくつかありますが、本格的に弁護団を動員して10年間やったのは伊達火力環境権が日本で初めてです。負けましたが、東京の淡路剛久

氏とかいろいろな学者を動員して環境権の大論争をやりました。それを、亡くなった安江良介さん（1935～1998年、元岩波書店社長）が当時、編集長だったから『世界』でも取り上げてくれて大きな記事になりました。

日本の住民運動について、保守支持層の分析なくしては語れないということです。ということは、今日の憲法の危機にあたっても、加藤紘一（1939年～、元自民党幹事長）が言うように、保守支持層の厚い層が憲法9条改悪に反対している。読売も産経もその点に関しては同一です。あの改憲学者の小林節氏（1949年～、慶應義塾大学名誉教授）までついに「9条を守ろう」なんて言い出して、共産党の演説会に出てくるようになった。それぐらい、逆に言えば安倍首相のおかげで憲法の危機に目覚めたということです。

しかも知事選挙は、2014年1月の東京都知事選挙は負けてしまったけれど、あとの、7月の滋賀県知事選挙は民主党の三日月大造氏（1971年～）、11月の沖縄県知事選挙は10万票の差でした（翁長雄志氏が現職の仲井眞弘多氏を破った）。まさかと思ったけれど、2015年1月の佐賀県知事選挙ではあれだけ農協をたたいた安倍政権が負けたでしょう（無所属の山口祥義氏が自公推薦の樋渡啓祐氏を約4万票差で破る）。地方はその時その時の問題を敏感に反映しています。民主党と共産党を合わせてもせいぜい10%から15%ぐらいの支持率だから、やはり保守が割れることと、第一党の無党派層を政治参加させることによってのみ、日本の民主主義とか憲法とかは勝利の展望を見いだせる、それを三つの県知事選挙は示しています。安倍政権は強いようだが、もろい一面を持っているということです。

とくに面白いと思ったのは、2014年7月の嘉田由紀子（1950年～、元滋賀県知事、元日

本未来の党代表）知事が辞めた後の滋賀県知事選挙の朝日新聞の出口調査です。その結果、無党派の5割以上が民主党の三日月知事に入れている。共産党支持者も20%程度は共産党に入れないで三日月に投票している。公明党は、出口調査では7割、8割入れたようになっているけれど、棄権してしまった。なぜかという、彼らは必ず事前投票に行きますが、新聞で調べたら、それがガクッと落ちている。数字上はまともに支持しているように見えるけれど、公明党支持者は棄権ということで安倍に抵抗したわけです。

維新支持者も浮動的です。滋賀県では自民党に次ぐ十何万票の比例区票を維新が取っています。橋下は知らん顔をしていたのに最後、安倍に義理立てして、応援に行きました。その橋下が来たにもかかわらず維新支持者の65%が、出口調査ですけれど、三日月に入れている。出口調査というのはわりあい正確です。世論調査は全国でせいぜい1,000人か1,500人だけど、出口調査はその地域だけで、全県で何万人です。出口調査というのは世論を一番正確に反映していると思います。佐賀県知事選挙で自民党が敗北したのも同じようなパターンです。安倍政権は強大な力を持っているように見えるが、地域で争点が明確にあれば、沖縄、滋賀、佐賀県知事選等のように、一人区で勝てる展望がある。それを、来年の参院選挙にどう生かすかが問われていると思います。

護憲政党の変節と壊滅

現今の政治状況について、私見を述べさせていただきます。今日的には社会党、共産党を含めて護憲政党の議席は1割もいません。社会党・社民党は今や絶滅危惧種政党です。70年代までの護憲三分の一以上勢力という議会勢力は完全になくなったわけです。しかし、世論調査をすれ

ば憲法第9条改正反対というのは逆に一時期より増えています。

今日、いわゆる平和憲法を守っている勢力はいったい誰なのか。社会党は消えて、共産党はまだ生きていますが、結局保守リベラル勢力、その大半は自民党支持者であり、さらに最大の政治勢力である支持政党なし層、最近では40%前後からときには50%に達する無党派の中のリベラル勢力が実質的には護憲勢力なのです。現在の「護憲政党なき護憲勢力」という存在を見据えなければ今後の議会過半数、非自民政権の展望はないと思います。

ではなぜ護憲政党はなくなったか。いわゆる旧左翼や旧社会党の人たちは、もともと過半数獲得から政権奪取という戦略がなかった。ただ議会勢力で護憲三分の一議席を確保して平和憲法を守ればいい。そういうことを長い間やってきた。三分の一議席だから、旧総評や社会主義協会のようなソ連のマルクス・レーニン主義とか中国の毛沢東路線を支持してさえいれば生きて行けるということで、議員も党も労組もやって来た。安保闘争の後、1960年に江田三郎（前述）が、護憲民主中立の政権構想を出すわけですが、それを「右翼社民」とか「右寄り」とか難癖をつけて徹底的に潰したわけです。その結果が三分の一議席さえ獲得できない状況をつくったというのが、私の見解です。三分の一議席獲得だけが目標になって政権構想など遠くの話だった。なぜ社会党護憲政党が消滅したかについて、しっかり総括する必要があります。

話は飛びますが、今度の集団的自衛権の解釈に対して東京ではわっさわっさと、毎日、毎日デモをやっています。でも、地域でちゃんと反対の決議をたくさん、一番やっているのはどこだと思いますか。東京など、あれだけやってもそういう決議をしたところは1カ所もないですよ。一番やっているのは長野県で、北海道、

沖縄という順序です。つまり、地方です。なぜか。いろいろ聞いてみると、60年安保の時に最大動員したのも、大阪や北海道や名古屋ではなくて長野県です。あそこは豊かでない県だから戦争中に最大の満蒙開拓青少年義勇軍が行ったところですよ。最大の被害を受けて、命からがら逃げ帰ってきた人たちですから、身に沁みて痛い目に遭っているわけです。その地域の人たちの思いが、労働組合だけではなくて、長野県の青年団が中心になってあの60年安保の大動員、日本最大の動員をしたわけです。そういう歴史があるから、彼らは地域というものを分かっているから、いざという時に地域で決議を積み重ねているというやり方を知っているのです。

そういう例はいくらでもあります。日本の基地闘争にしても住民運動にしても激突の時の写真とか、三里塚でもそうですが、学生が殺した、殺されるというようなことは書かれています。しかし、戦後史の中ですごく欠落しているのは、地域の生活と運動という観点です。その原点から物を見ないと、ただ砂川の激突とか安保の国会デモとか、それは重要だけど一つの部分です。民衆の生活と現場感覚は違います。だから僕は若い学者の人たちに、もうちょっと現場に行ってくれと言います。みんな人の書いたものを読んでものを書いていくから、私に言わせれば本当のことが書けない。

白井聡氏（1977年～、京都精華大学専任講師）が『永続敗戦論』（太田出版、2013年）のなかで、「敗戦を「終戦」という言葉でごまかしたことで、日本は戦争責任をきちんと総括できず、それが戦後の曖昧な日本を形成した」と言いましたが、戦後左翼の社会党総評勢力も、なぜ三分の一の護憲政治勢力が今日のような状況に立ち至ったかという敗北の責任を総括していない。1994年の村山自社さ政権で、安保

自衛隊容認を決め、消費税値上げもやった。小選挙区も土井議長と村山首相の時代（1994～1996年）に決めたわけです。そういうことをやっておいて、野党になればまた「護憲9条を守れ、消費税反対」を言うのです。

しかし、もう護憲のお題目だけを唱えている政治勢力だけでは乗り切れない時代になっています。しかも一番滑稽なことは、旧社会党の左翼や労組などは村山政権の変節に一言の文句もなく、自社さ政権バンザイをしたわけです。私は抗議して社会党を離党しましたが、みんな「政権に入るだけでいい」と言うのです。

1994年7月、自社さ連立政権の臨時国会で村山首相は「日米安保体制の堅持、自衛隊の合憲、日の丸君が代容認」とそれまでの社会党の方針を大転換しました。これを石川真澄（1933～2004年、元朝日新聞記者、桜美林大学教授等を歴任）は次のように指摘しています。社会党の大転換は、共産党を除く、「政策ののっぺらぼう化」をはっきりともたらした。その結果、戦後政治を主導してきた「保守」は、日本政治全体を覆う広い合意の体系となり、より強い継続に向かいつつある（石川真澄『戦後政治史』岩波新書、1995年（新版2004年））。これはまさに、今日の政治状況を先取りした言葉です。

村山演説の2カ月後に社会党大会はその村山演説を追認しました。そのうえ、消費税反対の旗も降ろして、1996年の橋本自社さ政権で、社会党籍の久保亘蔵相（1919～2003年、社会党書記長・副党首を歴任）が自ら先頭を切って消費税値上げをやった。彼はかつて野党時代消費税値上げ反対のリーダーとして、野党多数の参院で消費税値上げを阻止した人です。それが消費税値上げの先頭を切ったわけです。あらゆる意味で、かつての社会党支持者を裏切った。戦後社会党を支持してきた有権者には説明なしの豹変です。当然のことながら次の総選挙、参

院選で壊滅的な敗北を喫したのです。

戦後の護憲社会党を支えてきた支持者には何ら説明もなく、護憲9条の旗を降ろした。それが自社さ政権を降りるとまた「護憲9条を守れ、消費税反対」を言うから二重の意味で背信行為です。護憲の土井さんと左翼はありがたいが、その護憲の土井議長が細川政権以降、村山、橋本、武村正義の自社さ政権までを担当し、小選挙区制度を容認し、安保自衛隊を容認し、消費税値上げの承認をした国会の議長をつとめていた。とくに土井議長時代に小選挙区制導入を行った政治的責任は重い。ところが左翼はそれを「護憲の土井」「護憲の村山」だとありがたいがっている。度し難い同族意識と言ってよいと思います。

村山連立政権と自民党の復権

しかし世間は正直です。そういうまやかしをちゃんと見ている。2013年3月、社民党の福島瑞穂氏（1955年～、社民党第3代党首）の『脱原発を実現する——政治と司法を変える意志』（海渡雄一との共著、明石書店、2012年）の出版記念会で、中森昭夫（1959年～、作家、アイドル評論家）という人が「護憲の旗を投げ捨てて自民党を助けた社会党の村山元総理は原発の前で腹を切れ」と言ったと報道されました。中森氏のツイッター⁽¹⁾には以下のようなことが書かれていました（抜粋）。

福島みずほ社民党党首とパートナーの海渡雄一氏の『脱原発を実現する』出版パーティーへ。／会場は社民リベラル、脱原発一色。来賓の挨拶を聞いていて、これではダメだ……の思いがひしひし。／社民党は消滅寸前ではないか？ その認識、緊張感がまったく感じられない。／あげく村山富市元総理が壇上に立ち、社民党の脱原発の路線は正しいが、なぜ、それが広がらない

のか……と説教を始め／周りを見回しても、呆れたり怒ったりしてる人の姿はなく、みんな感心した様子で拝聴している。／最後のあたりで挨拶してくれと声がかかり、壇上に立った。「政治に素人のアイドル評論家だけど言わせてもらいます。これでは原発など一つも止まらない。夏の参議院選挙(2013年)じゃ安倍自民党は圧勝でしょう。社民党は無くなるかもしれない。／さっき村山元総理がなぜ社民党は正しいのに広がらないかと言ってたけど、それは村山さん、あなたが自民党と組んで総理大臣になって自民を延命させ、社会党をめっちゃめっちゃにしたからでしょう。／社民党は絶望的です。それが政治に素人の私の意見です。」

世間と社会党や民主党の人たち、とくに旧左翼にはこういう認識がまったくない。いくら原発ゼロだとか脱原発と言っても、言ってる連中が有権者から信頼されていない。これを自覚したところからすべてが始まるのです。

民主党の原発政策の諸問題

近年の全体的な世論としては、安倍首相がいくら憲法を変えようと言っても変えられない。今の状況では国民投票をできないでしょう。だから最も姑息な集団的自衛権というものを合憲だという理屈をつけて、アメリカの忠実な子分でありつづける道を選んだのです。しかし、反面、村山談話もしぶしぶ踏襲せざるをえないわけです。そういう状況を、私は「護憲政党なき日本の護憲勢力」と呼んでいるわけです。最も特徴的なことは、福島原発事故以降、保守と革新という分け方はもう通用しない。原発でも保守や右翼陣営の人々の方が明確です。小泉元首相はその典型です。彼は「即原発ゼロ」です。右翼の中にも「我々は日本国を愛する。しかし原発はこの日本国の存在すら消してしまう。だ

から原発反対だ」と分かりやすい。そこへ行くとも民主党の「脱原発」とか「原発ゼロ」とかはまやかしです。原発ゼロといっても、できる限り早い時期と言っているだけで、期限は明示できない。しかもそういった口の下から、2012年野田政権末期になって大飯原発の稼働、そして大間原発等3原発の工事再開を認めている。大間原発が稼働するのは早くても2020年前後でしょう。そうすると40年稼働としても大間原発など三原発の廃炉期限は2060年近くになります。

そして菅直人元首相が「原発ゼロを決めたのは画期的」と自画自賛している民主党政権のエネルギー政策の中には明確に「原子力規制委員会の安全確認を得たもののみ再稼働する」となっています⁽²⁾。これでは民主党への信頼や期待は生まれる筈がない。有権者はよく見ているから、菅直人首相の、「消費税自公案抱き付き発言」の2010年参院選挙以降、2012年総選挙、2013年参院選、2014年総選挙と国政選挙4連敗です。

その民主党の有権者に対する責任についての確な指摘をしているのは、元総務相の片山善博さん(1951年～、慶應義塾大学教授)くらいではないでしょうか。

時間になりました。ご静聴ありがとうございました。

- (1) 中森明夫「ニッポンへの発言：キーワード リベラルの自滅と暴言の自由」, https://twitter.com/a_i_jp 2013年2月27日(2016年6月8日閲覧)。毎日新聞東京夕刊2016年1月19日, <http://mainichi.jp/articles/20160119/dde/018/070/015000c> でも同じ内容を閲覧可能(2016年6月8日閲覧)。
- (2) 原発に依存しない社会の実現に向けた3つの原則『革新的エネルギー・環境戦略』2012年9月14日, 国家戦略室エネルギー・環境会議, http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy09/pdf/20120914/20120914_1.pdf (2016年6月8日閲覧)。